

芽山椒

能村 研三

先師登四郎没後二十年

行く春を死でしめくくる人ひとり

先師登四郎はこの句を遺し平成十三年五月二十四日に九十歳でこの世を去った。今年は亡くなって二十年目の節目の年となる。晩年になっても常に自己変革を促し俳句の新しみを追求しつづけた登四郎は、没後二十年を経た今でもなお俳壇でその存在感を強くしていると言える。

今年一月に刊行した『能村登四郎の百句』は昨年十月が「沖」創刊五十周年であったので、その記念の意味も含まれていたが、むしろ今年が生誕百年目にあたることと没後二十年になることも意識しての出版となった。

幸い俳壇の諸先輩や「沖」の皆さんからもあたたかい反響を頂きこの機会に出版出来たことを喜んでいる。

そんなところに、市川市文学ミュージアムの担当者から、今年が「能村登四郎生誕百年、没後二十年」

芽山椒ぱんと叩いて登四郎忌
湖に降る雨を見てをり軒粽
遠嶺みな牛臥のかたち余花曇
大旗を顎もてたたむ夕永し
桜薬降る銭湯のありしあと
存続の老舗旅館の幟竿

片寄せの雨戸一枚花疲
木が鋸を唾へしままに春の雷

溝浚へ老巧ばかり集りて

清明や歩きて広げゆく記憶

にあたることから、「俳人 能村登四郎と能村研三展」を開催したいとの申し入れがあった。
十年前、「登四郎生誕百年、没後十年」の時には、文学ミュージアムの前身の文学プラザが企画してくれたものであったが、この時はまだ私も職員であったので、少し面はゆい思いをもっていたが、今回はそういった気持ちも少し払拭されてこの企画にかかわることができた。

当時は「能村登四郎その水脈」という図録が作られたが、今回はこの図録をもとに加筆編集したものになり「火の系譜 市川が育んだ俳人 能村登四郎 能村研三」というタイトルとなった。登四郎に関しては六章、研三に関しては四章の構成となる図録冊子である。

展覧会も七月から来年の一月まで長期に渡って、文学ミュージアム通常展示室で開催される。

能村 研三